ヒューマノイド (2)

伊坂 幸太郎

（「僕」は職場での会議中、中学時代のことを思い出しています。ある美術の授業中タクジは転倒し、絵の具が周囲に飛び散りました。）

タクジは立ち尽くし、少ししてから謝った。耳まで赤くなっていた。美術の授業は急きょ、雑巾とバケツを使った大掃除の時間となる。誰かが舌打ちをし、別の誰かがタクジを責める言葉をつぶやいた。僕はといえば、①謝り続けるタクジの顔を見ることができず、ひたすら床を拭いた。

その日の放課後だ。

教室を出た僕を、タクジが呼び止めてきた。何の用かと思えば、「明日、六月十日はロボットの日らしいんだ。語呂で、ロボットと読めるから。」と言う。「駅前の広場で、ロボットに関するイベントをやるから、いっしょに行こうよ。」

②怒りにも似た、いら立ちが湧いた。

さっき絵の具をひっくり返し、クラス中に迷惑をかけたというのに、どうしてそんなにのんきなことが言えるのか。何がロボットのイベントだ。

「行かないよ。」自分でも意外なほど、冷たい声が出ていた。「それどころじゃないから。」

タクジは笑顔のできそこないを浮かべた後で、視線をそらした。

「そうか。そうだよね。」彼は寂しげな表情になったが、雰囲気を少しでも和らげるためなのか、「じゃあ、二十歳になったときに。」と言った。軽口のつもりだったのだろう。「ロボットの日、六月十日に、駅前広場で会おう。」

「意味のわからないことを言わないでよ。」

タクジは③肩を落としたが、最後の力を振り絞るかのように、「僕がロボットを作るとしたら、転ばないようにはするね。」と口にした。

僕は無言で回れ右をして、廊下を先に進んだ。その背中に、「二十歳がだめなら、じゃあ、三十歳になったときにしようか。」と彼の声が聞こえてきたけれど、立ち止まらなかった。

週明け、タクジが引っ越したことが判明した。タクジ側の希望で、みんなには知らせることができなかった、と先生が申し訳なさそうに説明するのを、僕は窓の外を眺めながら聞いていた。

（中略）

タクジが引っ越した後、僕は連絡を取ろうと思ったものの、行動には移さなかった。最後のやり取りに後ろめたさがあり、その後ろめたさと向き合うことを避けていたのだろう。部活動の大会や高校受験のあれやこれやで忙しいのをいいことに、結局、それきりになった。ただ、時おり、タクジとの最後のやり取りのときの自分の態度を思い出すと、胸の奥に重苦しいものを感じた。

駅のホームで、電車が来るのを待っているときも、僕はタクジのことを考えていた。あの美術の授業で、タクジはわざと転んだわけではなかった。謝ってもくれた。

プラットホームに設置されたディスプレイ広告が目に入った。カラフルな絵の具がはじける映像が繰り返されている。④頭の中を小突かれたような気分になった。

自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んでいた。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「謝り続けるタクジの顔を見ることができず、ひたすら床を拭いた」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア タクジの姿が痛々しくて見ていられず、気まずい気持ち。
イ 掃除をしなくてはならなくなったことにいら立つ気持ち。
ウ 床をきれいにして、クラスの仲を取り持ちたい気持ち。

〔　　〕

(2) ――線②「怒りにも似た、いら立ちが湧いた」のはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア 部活動や受験で忙しい中、タクジがのんきな態度でロボットのイベントに行こうと誘ってきたから。
イ クラス中に迷惑をかけた直後にもかかわらず、タクジがそのことを気にかけていないような発言をしたから。
ウ まもなく引っ越してしまうのに、タクジがそのことを隠して別れと関係のない話を進めようとしたから。

〔　　〕

(3) ――線③「肩を落とした」とあるが、「肩を落とす」の意味として適当なものを選びなさい。

ア 対立しているものの一方の味方をする。
イ 責任や義務から解放されて気が楽になる。
ウ 落胆や失望などでうなだれる。
エ 相手を肩につかまらせ助けてやる。

〔　　〕

(4) ――線④「頭の中を小突かれたような気分になった」とあるが、このきっかけを正しく述べているものを選びなさい。

ア ディスプレイ広告に、中学時代の美術の授業での出来事を連想させるような映像が映っていたこと。
イ 中学時代の後ろめたさを思い出していたところ、会議が終了して気持ちを切り替えることができたこと。
ウ 自宅に向かう電車がホームにやってきたことで、タクジのことを思い返していた思考がふと途切れたこと。

〔　　〕